

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	恩田育美	指導教員 (主査)	宇野耕司

論文題目	ソーシャルサポートとコンパニオンシップが 育児期母親の心理的ストレス反応に与える影響
------	---

本文概要

【問題と目的】近年、子育てを取り巻く環境は変化し、子育て支援施策の強化・サービス拡充がなされてきたが、児童虐待など社会問題への解決策は見出されていない(笹川, 2015)。育児期母親による虐待の要因の一つにストレスがある。人生上数少ないが、大きな影響をもたらすライフイベントは多く経験するほどストレスを高めるとされている(永井, 1996)。日常的に生じる些細な煩わしい出来事(Daily Hassles, 以下 DH)も、一度にもたらされる影響は小さくても、時間経過とともに積み重ねられるため、その影響力はライフイベントに勝るとも劣らない。ストレスを軽減する要因として、コンパニオンシップ(companionship)が挙げられる。コンパニオンシップとは、楽しむことそのものが目的である、日常の何気ない関わりや娯楽の共有で、それが結果として援助的な効果をもたらすものである(Rook, 1987)。従来から注目されてきたソーシャルサポートは、問題解決やストレス軽減が目的であるため、コンパニオンシップと区別すべきとしている(浦, 1992)。また、ライフイベントなどのメジャーストレスラーによるストレス反応の軽減にはソーシャルサポートが、DH などのマイナーストレスラーによるストレス反応の軽減には、コンパニオンシップが有効とされている(Rook, 1987)。しかし、コンパニオンシップをソーシャルサポートと弁別した尺度はなく、コンパニオンシップの効果は検討されていない。そこで本研究では、コンパニオンシップ尺度を作成し、ソーシャルサポートとコンパニオンシップが育児に関連する DH とライフイベントによる心理的ストレス反応にどのように影響を与えるのか検討した。

【方法】子育て支援センターや保育園にて、3歳以下の子どもを持つ母親 124 名に WEB 上の無記名式アンケート調査を行った。調査内容は、①フェイスシート、②育児関連 Daily Hassles (以下、育児関連 DH) (唐・矢嶋・中嶋, 2007)、③生活出来事尺度(宗像, 1986)、④ソーシャルサポート尺度(荒牧・田村, 2003)、⑤コンパニオンシップ尺度(Rook, 1987; 嶋, 1991; 吉田, 2004; 細田・田嶋, 2009 を参考に作成)、⑥心理的ストレス反応尺度(SRS-18) (鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野, 1997)である。また、⑤コンパニオンシップ尺度の妥当性検討のため、⑦短縮版 UCLA Loneliness Scale (以下、孤独感) (岩田・岡田・朴・中嶋, 2000) を用いた。主に階層的重回帰分析にて、分析を行った。

【結果と考察】コンパニオンシップ尺度は 1 因子構造で十分な信頼性と妥当性が確認された。相関分析の結果、生活出来事と SRS-18 は有意な相関がなかったため、生活出来事による心理的ストレス反応に対するソーシャルサポートとコンパニオンシップの効果は検討できなかった。育児関連 DH を説明変数とした場合、ソーシャルサポートが心理的ストレス反応を軽減し、コンパニオンシップは影響がなかった。しかし、育児期母親の夫や母親など、ソーシャルサポートとコンパニオンシップの相手を区別して分析すると、相手によって異なる結果が得られた。夫と子どもが生まれる前からの友人は、一貫してソーシャルサポートがあらゆる心理的ストレス反応を軽減したが、母親や子どもを通じた友人は、SRS-18 の下位因子によっては、ソーシャルサポートではなくコンパニオンシップが心理的ストレス反応を軽減した。本研究の結果から、コンパニオンシップとソーシャルサポートは異なる独立した概念であると示された。また、育児期母親の子育て支援において、コンパニオンシップ形成の重要性も指摘された。具体的には、ソーシャルサポートとコンパニオンシップ 2 つの社会関係形成に関する心理教育プログラムの開発や子育て支援者への育児期母親の心理特性に配慮したコンサルテーションが考えられ、特にコンパニオンシップの形成そのものを支援の目的とする重要性が示唆された。